

# 砂丘に生育する植物

## ■位置

天然記念物鳥取砂丘あるいはその周辺の海岸砂丘地帯（図 1）。第 3 砂丘列西側，あるいは第 2 砂丘列から海側が観察しやすい。

## ■選定理由

鳥取砂丘のような雨の多い海岸砂丘では，表面の砂の下には常に湿った砂の層があり，飛砂に適応した独特の植物群落が成立する。大規模な海浜植生は，鳥取砂丘を特徴づけるもうひとつの要素である。

## ■観察の意義

海浜の植物は海流によって運ばれ，広域に分布するものが多いため鳥取砂丘に固有の植物はない。しかし，鳥取砂丘のような大規模な海浜植生は国内にほとんど残っておらず，学術的に貴重である。鳥取砂丘で見られる植物は多年生草本が多く，単子葉植物 6 種，双子葉植物 9 種をあげられる。他に低木 2 種がある。これらの植物は採集できない点に注意のこと。

## ■不安定帯の植物

砂丘の中で，海に近く砂の移動のはげしい場所は「不安定帯」と呼ばれる。コウボウムギ(図 1)はここに広く分布する。やや太い根茎を砂中に長く伸ばし，地上茎を砂の上に伸ばして大群落をつくる。砂に覆われても，砂の上に茎を伸ばして旺盛に生育する。砂が削られる場所では茎の基部が露出するようになる。この部分の繊維が「こうぼうの筆」と呼ばれる。全国の海岸に分布するが，鳥取砂丘の群落はたいへん大きい。

ハマゴウ(図 3)はほふく性の落葉低木で，砂中に深く直根を伸ばす。茎が砂中を長くはう。このため砂を留めやすく，しばしば小さな丘をつくる。ハマゴウの枝は丈夫で，個体が枯れた後も枝は残り，砂を留める効果をもつ。種子は海流にのって運ばれ，太平洋沿岸の国々に広く分布するが，国内では砂浜の改変などで希少になった場所も多い。

ハマボウフウ(図 4)もよく発達した太い直根を地中深くに伸ばす。砂の上に厚くて光沢のある葉を放射状に広げ，たくさんの毛で飛砂から体を守っている。密な群落をつくることはなく，



図 1 観察地点(国土地理院 2.5 万分の 1 地形図「鳥取北部」)



図 2 コウボウムギ(カヤツリグサ科)。雌雄異株で茶色の穂が雄花，短い緑色の穂が雌花。花は 4 月下旬。



図 3 ハマゴウ(クマツヅラ科)。落葉低木，花は 7 月。



図 4 ハマボウフウ(セリ科)。花は 6-7 月。

砂丘内に散在する。若葉、若芽は食用となり栽培もされるが、国内では絶滅に瀕している場所が増えている。

オニシバ(図 5)は、芝生をつくるシバよりも大型で、全国の海岸砂浜に分布する。鳥取砂丘では風あたりのよい小尾根に多い。針金状の根茎をもち、節ごとに地上茎を伸ばす。シバのように密で大きな群落にはならない。オニシバも大都市圏の海岸では希少化しつつある。

テンキグサ (ハマニンニク, 図 6)は長い根茎を持ち、茎は直立して、高さ 1m になる。鳥取砂丘では東側の林沿いに少数がみられる。浦富海岸では比較的多い。北海道から九州北部に分布し、日本海側の砂浜地に多い。近縁種は砂防用に植栽されたものもある。

ネコノシタ (ハマグルマ, 図 7)は砂丘内の第二砂丘列より海岸よりにのみ分布する。茎は砂上をはってよく分枝し、密な群落をつくる。茎と葉に剛毛があり厚い葉はざらついて、触感がネコの舌に似る。北陸・関東からベトナムまで分布する。

ハマヒルガオ(図 8)も海岸部に多い。白い地下茎が砂中に長く伸びて密な群落をつくる。4-5 月にピンク色の花を多数つけ美しい。一部には白花の株もある。葉は厚くて光沢がある。岩石海岸や人工護岸の小さな砂だまりにも見られることがある。

ハマニガナ(図 9)も白い地下茎が砂の中を長くはうが、細くて切れやすい。砂地の中に単独で数mほどのかたまりをつくる姿がみられる。砂丘内のあちこちにふつうに見られ、春から秋まで黄色い花をつけている。東南アジアからカムチャッカまで分布は広い。



図 5 オニシバ(イネ科)。花は 6-8 月。



図 6 テンキグサ(ハマニンニク, イネ科)。花は 6-7 月。

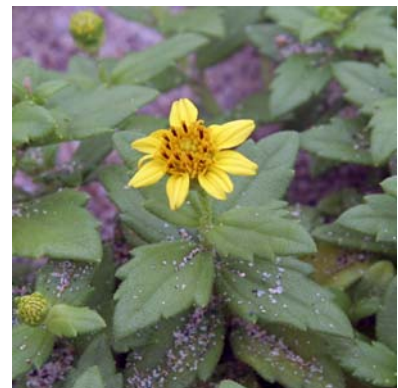


図 7 ネコノシタ(ハマグルマ, キク科)。花は 7 月。



図 8 ハマヒルガオ(ヒルガオ科)。花は 4-5 月。



図 9 ハマニガナ(キク科)。4-10 月ころまで花をつけ続ける。

## ■不安定帯の植物

鳥取砂丘では、内陸側に砂の動きの少ない「半安定帯」やほとんど動かない「安定帯」が広がっている。ケカモノハシ(図10)は砂丘内の砂の動きの少ない場所に広く分布し、鳥取砂丘内ではコウボウムギとならんで最も多い。大量のひげ根でしっかりと砂をつかむ。茎や葉の両面に短毛が密生する。夏には高さ80cmほどになり、砂丘の草の多さを印象づける。全国の海岸砂丘で一般的な種だが、瀬戸内海沿岸では少なくなっている。

コウボウシバ(図11)は、砂丘内の比較的水分の多い場所に分布する。観光客の多い馬の背(第2砂丘列)下には「オアシス」と呼ばれる水分の多いくぼ地があり、季節により大きな池ができていくことも多い。水分の多いオアシス周辺にはコウボウシバの密な大群落が見られる。ただしケカモノハシとは異なり、コウボウムギは高さ20cmほどのため、夏のオアシス付近は緑のじゅうたんを敷き詰めたように見える。種の分布は広域で、日本全土から東アジア、南米チリにまで分布する。

ビロードテンツキ(図12)は砂丘内に散生する。単独で大きな群落をつくることはほとんどないが、砂丘内に広く分布し、たいていの場所で他の植物と混ざって生える。高さ15cmほどになる。茎や葉には白い絹毛が密生し、これがビロードに例えられる。北陸・関東以西から熱帯に分布するが、大阪湾などでは希少化が進んでいる。

ウンラン(図13)は、初秋にランに幾分似た美しい花をつける。黄色の花は砂丘の中では目立つ。ゴマノハグサの仲間であり、ランではない。多肉でへら型の葉をつけた茎が斜めに立ち上がり高さ20cmほどになる。鳥取砂丘内では、見られる場所は限られており数も多くはない。本州以北に分布し、南限にあたる瀬戸内海沿岸では希少化が著しい。

カラヨモギ(図14)は、砂丘のほか河原の砂地にも多い。よく分枝して下部が木質化し、直径1mもの大きな株になることがある。小さな葉を多数つける。鳥取砂丘内で一時期著しく増加し、その景観が問題となった。砂丘内では現在はほとんど見られないが、鳥取大学乾燥地研究センター前の砂丘には大きな群落がある。本州から東南アジアにかけて分布する。

ハマウツボ(図15)は上記カラヨモギの根に寄生する一年



図10 ケカモノハシ(イネ科)。花は7月。



図11 コウボウシバ(カヤツリグサ科)。花は4-5月。茶色が雄花、緑色が雌花。



図12 ビロードテンツキ(カヤツリグサ科)。花は7-8月。



図13 ウンラン(ゴマノハグサ科)。花は8-9月。

草。太い茎を直立させて高さ 15cm ほどになり，6 月頃淡紫色の花を多数つける。カワラヨモギが少なくなった鳥取砂丘では，ハマウツボはまれ。全国的に分布するが，環境省のレッドデータブックで絶滅危惧 II 類に指定されており，太平洋側では地域的な絶滅が増えるなど各地で希少化している。

スナビキソウ(図 16)は地下茎を砂の中のにぼす。茎や葉には軟毛があり高さ 30cm ほどになる。初夏に香りのある白い花をつける。北東アジアー帯からヨーロッパにまで分布するが，鳥取県内では準絶滅危惧にランクされ，鳥取砂丘でも一時は絶滅とされたほど数が少ない。

ハマベノギク(図 17)は，基部で分枝した茎が地上をはい，先が立ち上がる。秋に茎の先端に紫色の頭花をつける。富山から九州までの日本海側に分布する。鳥取砂丘では西側の一部に分布が限られる。

ハイネズ(図 18)はヒノキ科の針葉樹で雌雄異株。葉はするどくとがり，触ると痛い。スリバチと呼ばれる砂丘の凹地に成立したクロマツ林内に局所的に分布する。北海道から九州まで分布するが，北陸以北の日本海側ではやや希少とされる。

#### ■文献・参考資料

財団法人 自然公園財団 (2010) パークガイド 山陰海岸国立公園鳥取砂丘，48pp.

(永松 大；2011.03.01)



図 14 カワラヨモギ(キク科)。9-10 月に開花するが花は目立たない。



図 15 ハマウツボ(ハマウツボ科)。花は6月。この写真は花後に枯れたもの。



図 16 スナビキソウ(ムラサキ科)。花は6月。香りがある。



図 17 ハマベノギク(キク科)。花は9月。



図 18 ハイネズ(ヒノキ科)。